

資料紹介

小橋川清福著 「古き壺屋を語る」

伊集 守道

小橋川清福氏は壺屋出身の陶工である。長兄には同じく陶工の小橋川清秀氏がおり、清福氏は三男にあたる。大正三（一九一四）年に生まれ、幼い頃から壺屋で育ち陶工として働いていたが、太平洋戦争の際には徴兵され、終戦後は一時ハワイに収容されていた。帰沖後は、主に瓦工として県内各地で働き、住居は沖縄市に移った。現役として五〇歳頃まで活躍。その後は、清福氏の長男が住む宜野湾市に住居を移し、平成十（一九九八）年に亡くなられた。

小橋川清福著「古き壺屋を語る」は、清福氏の実体験を交えて、戦前の壺屋の風景や出来事、言い伝えが克明に記録された貴重な資料である。本資料は、本人が手書きで原稿を残しており、一部の関係者には知られていたが、管見の限り活字化して公表されたことはないようである。今回はその貴重な資料を紹介する。

なお、本論に付随して製作したと思われる小橋川清福氏作成の民俗地図も残されている。こちらは『壺屋現代陶工展』（沖縄県立博物館友の会、一九九一年）・『琉球の陶器 復刻版』（榕樹社、一九九五年）に付録として掲載されている。今回は紙幅の関係で掲載することがで

きなかったが、併せて読むとより内容が理解しやすいので、参照をお勧めしたい。

最後にはなりますが、「古き壺屋を語る」を公表するにあたって、小橋川清福氏の長男清市氏にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。

【凡例】

- ・明らかな誤字・脱字については適宜修正している。
- ・筆者の句読点・括弧書き・送り仮名が不統一な部分もあるため、適宜修正しているが、文意を損なわないよう最低限に止めている。
- ・小橋川清福氏の住所が記載されている箇所は個人情報のため削除している。

【本文】

郷愁

平成五年 参月九日

此の書冊は郷に流れ付いていた古式風習から成る子供達の戯れごとや地銘柄を案内して、一般町民のご理解を頂ければと云う主旨のもとに記述してあります。

読者各位

筆者学識未熟故、誤字脱字文面不順を予めご了承を乞う

古き壺屋を語る

球陽史によると「尚貞王十四年、一六八二年昔壺屋ハ美里知花・首里宝口・那覇湧田等二有リテ共計三所、是ノ時二至リ其ノ三地ノ陶窯ヲ牧志邑ノ南ニ移シ在リテ以テ一所トナス也」とあって、首里王府は直ちに三所の陶工達を呼び寄せて統合し、集落を形成させた結果、壺屋の陶器事業は今日までも継続して、尚発展途上に邁進しているものと推測されます。先遣者に対しては、陶業に關する必要な敷地も授けて御拝領用地と称し、製品は専ら御用品に当て自由販売を阻止する為に、村の入り口に番所を設けて厳しく監視の目を光らせていた。其の時に井戸を掘り番所井戸バンジュウガと称して、その上部に琉球松を植えてそれがすくすく成長し、直径約二メートル位の幹に育ち三百年余の壺屋の歴史を物語り、悠然として聳えていたあの姿を今に思い出せば実に名残り惜しい。何故王府は当地を指定したのかといえば、陶器の原料となる黒土や赤土、そのうえ火を取り扱うに必要な水も豊富で、総ての条件が整えている關係上から現地を指定したとの説もあります。此所に御拝領地を授かった先遣者の姓を記載しておきます。宮里家・高江洲家・嘉数家・国場家・渡口家・島袋家・新垣家・渡慶次家の八姓とあります。先づ壺屋の集落を訪れる際には、北方からは十貫路通りから牧志の村を通過して壺屋へ至るが、途中牧志村には坊主姿ボシの幽霊が出現するといわれる物騒なボージ墓があるので、そこを通り越すには相当な勇気が必要でありました。

西の方からは壺屋への主幹道路として城岳の位置より樋川通りを経て石川の屋取小一ヤルイグワの前を通りすぎて軽い坂道を下りていった処がター

ブックワミチ、またはターミチとも称する。その一带はほとんど田圃に囲まれていたので、自然にターミチと言う地名が付いたのではないかと推測されます。そのターミチは雨期の種満亡種の頃に成るとあつちこつちの蹄の跡に馬糞から自生するウマヌクスナーバ(茸の一種)が生えていたことが記憶の中にあります。亦豪雨の際にはヤンチャ坊ウーマク児童達が寄り集まり、畦畔アブシ越る(アブシクイルー)という危険な戯れ事もやっていた処も、現在は新栄通りという立派な地名に変わりアーケードもつくられて、当時と比較すれば夢の様な錯覚をおこし、道に戸惑う時もあります。その田圃道タムミチ通りには排水のため暗渠みたいな小さい橋が三ヶ所に架けられていて一番橋小一、二番橋小一、三番橋小一と名付けてあつた。一番橋小一辺りからは畦道アガリが出来て東方面の人々にとっては便利な近道で良く利用していたが、雨期に入ると泥濘道になり滑り易くて転げる処があるので、やむ無く遠回りする時も度々あつた。そのあぜ道は俗称ターミチグワと呼んでいた。今や時代の波に押し流されて面影もなく、神里原通りという地名に変わり大きなアスファルト道となり、車の往来が激しい街道になっている。当時の古老達はそのターミチグワとに關する謂れをこう話して下さつた。或年年号は不明であるが、大飢饉が襲い一般の家庭、特に下級の家庭は日常の生活に困難をきたし餓死状態に陥り、これに気付いた島袋家(屋号)メーヌイリ、亦はヤージョーシマブクとも称し、その主アルジが救済事業の目的として考案したのがターミチグワの工事で、作業に参加する家庭の者には食費代も取らずただで賄えて、その外飢えてゐる乏しい家庭の子供達の為にと自家用の池には毎日欠かさず笹

一杯に生芋を浸しておきなさいと女中に命じて飢を凌がせたと言う美談もあります。その隠徳は世々代々までも富栄えて世間一般からは下渡財産家と敬称されたとの説が残っています。ヤーサソーシニ、ム又、クイリ（飢える者に御飯を与えなさい）、ヒーサソーシニチンクシリ（寒さに震えている者には衣裳を与えなさい）と諺にも有るように誠に立派な行為であったと称賛致します。次は怪談話に触れてみましょう。

大正七年（某）壺屋の青年が辻遊郭から微酔加減で一人帰宅途中、現在の平和通り入口付近に差し掛かった際に、突然幽霊が出現して青年の前に立ち塞がり通行を邪魔されたので、自分を誑かすものと思ひこんで素裸かになつて狂人みたいに暴れ回つて猛烈に抵抗している様な青年の動作を、同じく遊郭からの帰途中の他の青年が見てこれを制止、いろいろと宥めて家に連れていき、家族に現場での状況を話して寝かさせた。ところが青年はその夜から亡霊に冒されて高熱を起し、翌日死亡。全く意外な急死に村中の人々の話題になつていたが、おそらく本人自身幻覚をおこして奇病に負けたのではないかと疑問の声も聞かれていたが、果たして真実は如何がだったでしょうか。人間本来臆病な者でその後夜一人で現場を通る際には何時も恐怖に怯えていました。大正九年といえは今から約七十一年前の事ですが、彼の当時は現在の平和通街や公設市場辺りは農耕地で、田圃には稲が植えられて期節になると、稲は穂を結び熟して垂れ下がる頃には、雀がそれを狙つて群がり、その対策に案山子を立て置き、被害を少なくともようと心得たが、あまり効果はなく自から大声をあげて追い払う風景

もよく学校帰りに見かけた場所ではありますが、今は那覇市の中心街になつて当時を振り返ると遠い昔の夢物語りみたいに雲泥の如しであります。俗称洞窟の下、現在は商店街で民家が軒を連ねて怖いという感じは全然ありませんが、其処の上部には洞穴があつて白骨の頭が散乱して、風葬時代の哀れさを子供心にもひしひしと痛感し、冥土の旅の儚なさを想いながら雨宿りした時が浮びます。昭和六年の雨期の頃突然大きな岩が落下して、途中で止まり行通に危険が生じて、壺屋の有志達は早速対策を構じ、那覇消防署へ除去作業を依頼して消防車が一台出勤して放水した結果、ようやく岩が滑り落ちて難なく事は済みました。ガマヌヒチャの道筋は現在のように三差路はなく、二股に別れて右へ行けば俗名カークヌウィーへ、左に行けば約三十度の坂道があり、右下に屋号新屋敷島袋家の荒焼甕の製作工場があつて、時々加工中のテピラの響がバンバン聞こえていました。附近一帯は広々とした場所で、巨木の琉球松が公共の番所井戸を抱き込む様に颯爽たる姿で聳えていました。坂道の端々には針状の刺があるフクルギ（方言名）が植えられて時季になると黄色い小花を咲かし、俗名ジューグワー（蜥蜴の一種）が尻尾をふりながら追い駆け回っているのを、学校帰りの餓鬼連中が尻尾を掴み捕り、無理矢理に唐辛子を口に押し込んでふらふらになるまでもて遊び、あげくの果は尻尾を切り離して、その残尾が蹴くのを見て喜び躁ぐ童心の儚なさと思出の坂道は通学路で非常に印象深い処であります。タンメーソリ墓小を抱えている様に双方に連なっている森がターチマーチュー、又はチブヤマーチューとも称して大きな琉球松が約三十本も生い茂り夏期の暑さを凌ぐ絶好の遊

び場として子供達が群がり、蟬（方言でアササー、ジイジャー、ワサワサー）これを捕ったり、風の強い日には亜旦葉で作った風車を廻しながら無心に駆け回って賑やかさを増して、片隅ではシッパウラビンチャーが沖繩相撲の技を競いあい、老人達も孫を伴なって観戦しながら涼を求めて和やかな風景も見られて非常に爽快でありました。偶には与儀の兵舎から勤務演習中の兵隊さんが大勢立ち寄ってくる時もあった、それを珍しがり老若男女が群がってターチマーチューを埋め尽くす時もありました。昭和七年六年そのターチマーチューに落雷があり、大きな二本の松が被害を受けて伐採された時の天災の怖さを思い知らされて、不愉快になった事が浮かびます。ターチマーチューから東方約四、五十メートル隔てた処に西ノ御宮があり、その西ノ御宮は大正七年に賓女堂ビシユルグワの御嶽から神霊を御招納して建造され、陶器加護の神様を祭る崇拜所であります。落成式の際には村芝居が催されて盛大なる余興も繰り広げられ、特に目立ったのが狂言喜劇町端又武太左（マチバタヌンターサー）創作者は高江洲（屋号カマニ）の某祖父様で、その一劇を以て観衆を沸かし、万雷の拍手を浴びていました。また傍らでは飛び入り歓迎の奉納相撲も催されて、得意の技テンメーガーキーで二、三名を倒して沢山褒美貰って喜ぶ者や、負けて閻魔面になる者もいて、様々な様相が窺われました。愈々行事も滞りなく終り式場を後に去りました。西ノ宮は長閑な場所、旧暦の正月元旦から四、五日間はお年玉を貰った子供達や、青年達も加えてパンミー、これは賭博行為であるが、常日頃は娯楽が少ないゆえか、あまり警察も厳重な取締りはしなかったが、親達はそのまま、賭博常習犯

に流れて行く心配があるので耐え難く、遂に巡回巡査に密告して現場を不意打させて、逃げ場を失ない捕えられて厳しくお灸を添えられる愚かな者も居ました。次にパンミーというのは貨幣を柱や壁を利用して弾き飛ばして相手の物に乗り重なった場合には勝になる。亦チヤンクールと言うのは掌一杯に貨幣を乗せて引つ繰り返して丁か半かを賭けて勝負を決める賭博行為のことです。扱壺屋の集落は仮にも東西に別れていて、東方にはアガリンラカリと称し、西方にはイリンラカリと称していましたが、西渠にはハナグチマーチューという地名があつて、其処に壺屋の村屋（俱樂部、現在の公民館のこと）があつて、集落の主軸になっていました。長老達からの伝説によれば、その地名の起源は元々は荒焼の登り窯が三基連なつて窯の先端に当り、窯の先端のことを俗にハナグチと称し、亦その附近一帯は松林になっていたので、ハナグチと松林を一緒にしてハナグチマーチューという地名になったとあります。俱樂部の敷地は随分広くて青年達の為に試練用の黒石が六〇キロと七〇キロの物体が備えられていたで、負じ嫌いの者は俺強いといわんばかりに担いで見せたり、差し上げて見せたり実力の相違を披露し、如何がとばかりに肩をふる自惚れ者もいて、片隅では沖繩相撲をとりテンメーガーキーで偶に勝つて自慢する者もいたが、実技のヌシグワで相手を投げとばして鼻高々と威張る輩も居て人の性格を曝露するさまざまな様相の場所になっていました。隣接には小さい公園もあつて腕相撲用の土台石が置かれていたので、前技の相撲に負けた悔しさに今度は腕相撲に望みをかけて挑戦する者もいたが、矢張り駄目であつた。道路沿いには直径一メートル

ルにも及ぶ雄大なる琉球松が颯爽たる姿を誇りげに聳えていた頃の風景が忘れ難く実に心恠しい。あのまゝ保存していて現在までも生息していたならば、今頃は立派な天然記念物に指定されていたのではないかと名残惜しい。ハナグチマーチューいえば、夏も冬も賑やかな場所です。人足が弛むことなく昼間は子供達が独占している様に騒がしく夕暮れになると青年達が一人二人と数を増して巫山戯ながら四方山話に花を咲かし、月夜になると乙女達も寄り添うて尚一層の賑やかさを増して夜更かし、一番鶏のハートヤーが鳴くのを聴いて吃驚、さつさと我が家を求めて去り明晩を楽しみにした。

次に紹介するのは風俗慣習からなる子供達の遊び戯れ。男の子は沖繩独特のブーサーから始まりヤイヤートウ、ウツケースーガーで甲乙を決めて双方に別れて競技が始まる。先づ(ボージウツチエー)(頭髪触合い)早く相手の頭髪に手が触れたのが勝となる。

(ギータームンロー)(片脚合戦)のこと。これは片方の足を上げて片方の手で掴み、片手は胸に当てぶつつかり合い、先に手を離れた者は負けとなるが、なかには意地悪者、ウーマクーがいてコンマーを入れる。想定外の急所を突く反則技のこと。勿論これは負けになる。

(ターガートツター)(偽鶏卵盗り)仮に小石三個をおき、一組三名ブーサーで守備と攻撃に別れて競技が始まる。両方から守備者の隙をみて偽の石卵を盗る仕組みになっているが、その際に足を蹴られた者は退くので負けとなる。

(ヌンクイスーブ) 雑技競争のこと。各人が持ちまえたの特技を披露して見せる。相手側から真似出来る者がいない場合には勝になる。

(テーヒチカチミンソリー)(手を繋ぎ合せて掴む遊び)最初は一人から次々につかまえて人数を増やして長く組合せて、最後の一人まで残さずつかまえた時には勝ち。

(ムートトウエー)(格闘競技)レスリング同様投げ飛ばしたり転がしたりする男童の遊び。

サガイウティー(落下)木の上に攀じ登り適当な枝ぶりを見つけて先端までいき、次第く次第に下がり最後は地面に降着する遊び。

(イシナーグー)(小石を遊ぶ)十個の小石を並べて一個づつ掴んで、地面に落とさず全部の小石を掴んでしまえば勝ち。

(ミチマー)(道麻)大体将棋、麻雀みたいな遊び。

(ウスバーセー)(伏せ隠す)これは男女共通の遊びである。先づ偽装した者を伏せ隠し、相手側にこれは誰かと聞く。相手側が明確に何某と名乗った場合には負けになる。

(トーフチ)(遠吹き)これは粘土の関係上、主に壺屋の子供達がやっていた遊具、方言名デーク、蘆科種類であるが秋季の頃に穂出し熟させてから芯を抜き取り、適当な寸法に切つて穴に粘土を込めて遠くまで吹き飛ばし距離によって勝負をきめる。

(ジツクンバー) 水鉄砲のこと。

(ゲッチョー)約十三センチの棒切れの先端を削りとつて頭の方を別の棒で叩いて遠くまで飛ばした者が勝となる。

(ニーシンクー)(二尽駆)二人が左右に別れて駆回り、早く元の位置へ着いた方が勝になる遊び。

(イツシンバーエー)或いはイツシニングエー。昔は石合戦のこと

をミールンマートウと呼んでいたが、一番怖くて楽しい遊びが石合戦であった。主に与儀、古波蔵、樋川の連合組と交戦していたが、敵方には悪名高い位牌小とか赤猿アカザルというイッペーウーマクーがいて戦々恐々としていたが、壺屋側には武器となるカーミンザリーが沢山あるから、いつも合戦は有利に展開されて愉快に事を運んでいました。偶には牧志一丁目や安里の餓鬼どもと交戦をしていたが、その凝りを受けて登校時や下校時に邪魔されることもあって仕方なく十貫路まわりさせられることも度々あったが、別に嫌な感じはしないで却って気楽な風景が見られて童心を引き立て、美栄橋辺りから甲辰学校までの川沿には赤黄色の鮮やかな甲羅をした潮招きの蟹(方言名)カタチミガニグワの群れが朝の太陽に向ってカチャーシーでも踊っている様な振る舞いもあり、亦此の通りには片山の帽子会社や電気会社、製材所専販局もあって距離にしては遠くても、馴れるに従いよく利用するようになっていたが、時折チブヤ、ガブ道を通り越して我が家へ急ぐ時もありました。帰宅後は友達同士が集まり、先づ此の戯れから始める。(アツタルジューグワー) この遊び方は人数によって両方に別れ先頭の帯を立膝のまゝつかんで後ろに並び先頭同士の挨拶をする。(マーモーチヤガチャン、モーチャン、チャンタバコーアジマーサヌ、ナーチユフチエーチラウタリミ、そこで動作に移る。アツタル、ジューグワークワースンナー)。粗ましの説明(何処へ行かれた、喜屋武の部落までいつてきた、喜屋武の煙草はとっても美味いからもう一服頂戴、なにを言うか顔を叩かれるよう、またあんなに立派な尻尾をしているのになぜ轢き裂くのか勿体ないと言う意味)

(トートーメーグワー) テンヌ、トートーメーグワーアガトミー、ナーラアガラン、アンセーナーワンネーチャースガ、アンセナーアガトーサ、是れも男女共通する遊び。二人が背中を合せてどつちかとなえる。天のお月様は出ているかな、まだ出ていないよ、それじゃ私は如何にする、それじゃ出ているよ、暁夜明けだ鶏が鳴く鳴くコケコツコーくという意味

(カタボンボン) 肩車、騎馬

(キービサーヌーエー) 竹馬乗り

(マータクーアギー) 凧上げ

(コールミグラセー) 独楽回し

(シマグワートーエー) 沖繩相撲取る遊び

(ヒサウリカキエー) 足相撲取り。膝と膝とを組み合せて押しあいすること。

以上が男児の戯で、次は女兒の遊び方。(ウユエーグワーセー) 飯飯ごと遊びから始まり、その時には必ずウーメーバクーと言う鮮やかな小箱を携えて、その中には自分で装作した可愛い人形と衣裳が入っていた。総ての玩具を納める為の必重品の様でもあった。又爪の先にはテンサーグー(鳳仙花)の花を指先に染めて晴々しい雰囲気の祝宴の真似事もみごとなものであった。それからマーイウツチエ(毬突)、チナモーリー(縄飛遊び)、イットガヨー(お弾き)、オーセートウ(お手玉遊び)、ジャンケンボン、凡その位であったが、当時の子供達は自立心が旺盛で乏しい時代に相応しく、お金が掛からないように工夫した遊具ばかりもて遊んで成長した訳であります。

愈々華やかなハナグチマーチューを後に約八十メートル位いった所にグンカンスージグワーという地名があつて、石垣の恰好がよく軍艦に似ていることから軍艦小路スレグワーと命名された様であります。直ぐ近くには六メートル位の丘があつて一般にはカマニーガマと称して、明治の頃は荒焼の登り窯が二基あつたのでカマニーガマ、廢窯後は子供の遊び場になつていたが、町内に不幸事が起つた場合には、村の使役青年二人（若者頭ワカムガシラ）が丘に登り、そこから法螺貝を吹き鳴らし、葬式への参列を告知する場所にもなつていた。軍艦小路スレグワーは双方に別れて、右は賓女堂ヒンニョウグワへ、左を行けばスイジョーヌヒラグワー、なぜ壺屋にスイジョーという名が付いた坂道があるかと不思議であるが、実は首里への往来はこの坂道を必ず利用していたので、出入口のことを方言ではジョーというから首里門スイジョーヒラグワーの坂道スレグワーと名付けられたのではないかと推察されます。その坂道を下りずつと行けば姫百合橋通りになるが、昭和の初期の頃までは橋はなく軽便鉄道の鉄橋を利用して川を渡っていたが、此処の通りは常時師範学生や一中、工業、工芸、女子師範、一高女生等の通学路になつていたが、昭和四年の雨期の頃風雨激しい折にも拘らず、ひとりの女学生が傘を差したまま無理矢理に鉄橋を渡ろうとした瞬間に突風が吹きバランスを崩して落下。そのまま渦巻く水流に呑み込まれて崇元寺近くの俗称カーラバンタに漂着。近くに居合せていた人が救い上げたが既に息絶えていたとこのことであります。それ以来県や学校並に教育関係者は、これを重視して早速対策を構じて木材の橋を架けて姫百合橋と命名。その訳は姫百合合同窓会が主催で、そのうえ死亡した生徒も同窓会員であつたことなども

考慮しての命名だつたとの事であります。

姫百合橋より東南約三百メートル位いった処に（追剥）フエーライモウグワ 匪頼毛小一ヒンニョウグワ という地名があつたのはどうも不思議である。次は俗名（森小一ムイグワの上）ウイ此の丘地は明治期より大正の初期まで荒焼の登り窯が二基もあつた場所であるが、不況に伴ない廢業となり夏の夜は涼を求めて近隣の老人や若者達が集い四方山話しに花を咲しながら、あの有名な妖怪火識名の執念火イニシヒを見る絶好の場所として陣取つて深夜まで頑張りとうしても見ることは出来ないで、とうとう諦めて帰ること、しばしばあるので定かなこと誰も信じ得なかつた。真下には製糖工場があつて製糖期になると煙突から濛濛と煙を吐き出し香しい匂いを漂はして非常によい雰囲気であつた。その製糖工場には知能低下の古堅小一フルギングワモ一サーという人が、雑役方がた馬追いに弛むことなく専属的に務めていたので、子供達はからかうように古堅小一フルギングワモ一サーヤークンバイと大きな声を張りあげて唱えていた。実は此の人中国系統で久米村の出身。昔なら国から恩給が貰える身分の高い筋柄とのこと。製糖工場より南側には賓女堂ヒンニョウグワの御嶽があつて壺屋の村の起源と共に陶器繁栄防火守護の女神として崇められています。巫女の諭しによれば賓女堂と城岳とは姉妹の神様なるゆえ度々城岳から聖地のビンジュルグワに（神火、ウシリ）が御降臨するのを拝観されたとのことでもあります。賓女堂小一ヒンニョウグワの神様は女神なるゆえに娯楽も御気に召されるとあつて神霊を慰めるといふ意味から旧暦の三月に入ると村の老若婦人達が集まり（チジン）婦人用の太鼓を打ち鳴らし東西に別れて（ガール）掛歌合戦が始まり先づ東渠アガリンカラの婦人は此の掛歌からイリンカー

ヌミジャールルミージールー、ヤシーガーヨーアガリンカーヌミジ
ヤーサンカラワーチュサオホイヒヤーク

西側の井戸の水は泥水で汚ないが、東側の井戸水は岩から湧き出る
からとっても綺麗な水という意味。

是に対し西側はハナグチマーチューヌマンナカニーハンチューヤー
マーアンアギーテヨ、アガリアングワーターヤーハンチトナガチオ
ホイヒヤーク

はなぐちまーちうと言う所に弾き罾を仕掛けて置き、東側の乙女達
は皆弾き飛ばすという意味。しかし、両方共も後に濁りはありません。

一方子供達はあの掛け歌の扇りを受けて本気になり東西紛争を起し泣
かされて帰宅する者もいました。男の子にとっては絶好の遊び場とし
て群がりシマグワートーエーカタボンボン（肩車）、ギータムンロー
（片足合戦）、サガイウティ（地上へ落下）高い榕樹に攀じ登り適当
な枝ぶりを見て次第く地上へ落下する遊び。好奇心に連れられていつ
も冒険的な戯れごとを好むのが男児達、季節になると聖地の賓女堂小
ーにも深紅のデイゴの花が咲き誇り憩いの場所としても適していた。

愈々三月の遊びの最後を締め括る藁鉢巻の行列（ミチジュネーイ）は
城岳を拜してから村へ帰り各戸を回り、一合がうたびみせーら、二合
がうたびみせーらと酒、物品を乞うて首尾よく終る。村の外れにクヌ
メーグワークーシーという地名が有りますが、そこは我々が子供の頃
家畜の猫が死んだ時には、うしろ足を縛り逆さまに吊り下げて風葬す
る場所になっていて、そこを通る際には子供心に（マヤグワーマヤ
グワワーガイヤラン、テグトウイヤーフーチンワンフー

チン、イヤーンカイタックワリヨーヒヤーク）と目を瞑りながら走った
思い出が残る。クヌメーグワークーシーも今は道もなくなり見る影も沙
汰する者もいません。クヌメーグワークーシーという地名は言葉の訛
から出来た物で、実はクローウーメーグワーク（小柄のお爺さんの家の後）
を意味するものであります。

さて壺屋の村といえば他の集落とは随分異なり、職業柄常に火を取
り扱い、その為には大量の水を貯えておく必要があるので堀池（クム
イ）を三カ所に備えて急難を凌いでいたが、現在は全部埋め立てられ
て後影はありません。一番大きいクムイはヒチャグムイでその附近に
は二つの井戸があつて一カ所は専ら女性達が洗濯する場所になつて井
戸端会議ウンタクヒンタク世間話に花を咲し独占、もう一つの井戸は
餓鬼どもが交替交替で飛び込み潜つて井戸底の泥をつかんできて自慢
して躁ぎ回る幼稚さが窺はれていました。クムイの南側の堤防にはヒ
ラマーチ（平松）池の約半分近くまでも覆い茂り、その景観は実に
見事な物でいつも人目をひいていました。池の中には餌を求めて鯉
や鮒、タナゲー、コンジンテナガ（海老料）、御玉杓子方言名はアタ
ビーンググワー、水澄ましなどが泳いでいて、その他鰻、田蟹、田螺
なども生殖していた。もう一つ子供達の人気物闘魚トイユ。この魚は色が付
いて喧嘩が強く、泡で巣を作り卵を産んで、それを守る為には人間の
小指にも噛みつく程の猛魚で是れの特徴はナビゲージューというてサ
クシミたいな格好している尻尾、次に強いのはミシゲージューであつ
た。時折久米村の堂小屋敷の方々が漁を求めて裸姿のまゝ網打ちす
る光景は長閑な時世を物語っていた。池のほとりには大きな榕樹が陰

を成して道行く人に好感を与えていた。その通りが俗名カーグヌウ
イー。上の傾斜の処に南又窯^{フエヌカマ}がある。此処は御拝領の敷地、我等の祖
先が築いた陶業の宝庫であり、附近一帯は微かに昔の原形を止めてい
ます。時々南蛮甕を焼く為に濛々と煙を排き出して如何にも焼物の壺
屋を表現して頼もしい限りの現象であります。窯の先端（ハナグチ）
の下の位置には（ウイグムイ）という堀池があつて、その池にはあま
り魚類は生殖していません、お玉杓子や水澄ましなどが泳いでいるだ
けであつた。それから夏になるとカーグヌウイ辺りは榕樹の実が成熟
するので、それを狙つてソーミナーグワーやカーニグンバー（黄金
虫）その他の小鳥が飛来するので、子供達も木陰で涼を求めながら寄
り集まり、上級生達もつばらタカブキーするソーミナーグワーを狙
うが、下級生等が一番取りやすいカーニグンバーを掴んでもて遊んで
いたが、捕獲した物を奪ひ合いとうとう喧嘩になり、自分の味方を沢
山集めてきて子供の世界だけにある掟（オートーシー）仲間から外さ
れる絶交のこと、を宣告されてとうとう一人ぼっちになり、その間は
絶対相手側のメンバーに話かけてはならないので縮々と片隅に一人潜
んでいるところを侮るようにオートーシーガ、ムヌイーネーマヤーヌ、
クスグワーケーナミナミと、いかにも本人を貶しているような替え歌
に尚更悔しさと不安を募らせているうちに童心ゆえに長くは続かない
で、相手が食べる物を持つている時には飢え心からか自から身を寄せ
てリークネーラ（仲直りしよう）と小指を差し出してひっかけ、そこで
仲直りが成立して元の様に友情が戻る。子供心は本当に無邪気でいじら
しいところがあります。

壺屋の集落は職業柄御祝いが多く、先づスピヌユーイーから始まり
（作業修了祝）

サンミンユーイー（計算祝い）

カマチミユーイー（窯の中に品物を積込む祝）

カマトミユーイー（窯の火を止める祝い）

カマンジユーイー（窯から焼品を出す祝い）

なんと五回もお祝いがあるので酔つ払いが夜毎のように徘徊してい
ました。一番盛大なお祝いはカマトミユーイーで祝の座には必ずカマト
ミジューシーマー（雑炊飯）が御馳走になるので、それを目当に何所
からともなくやつて来る一人の男がいて一日中無料奉仕するが、その
替に窯焼毎に雑炊飯を頂く条件付きであつて、物凄いジューシーマー
ジョーグー。よつて此の男の渾名はジューシーマーカミジャーと呼ん
でいました。その当時名護出身の荻堂旦那と言ふ薪割の達人がいたが
職柄よく壺屋の村に馴染んでいましたが、頑固者であつたのか頭に
チョン髷があり、それを子供達は珍らしがりこんな掛歌までもうたつ
ていました。ジューシーマーカミジャーカマヤチネークーヨー、ジュー
シーマークイグトイヤータマセーヌクスサ、ヨージロータンメーカタ
カシラージョートーと言ふふうには、無心に揶揄っていました。

扱て東リ渠^{アガリンチカ}の目抜き通りといえは前又門^{メヌメ}現在のやちむん通り、此
処は平坦で道幅も広くて人の往来も激しく子供達にとつてはよい戯れ
処として群がり男兒女兒入り乱れて、それぞれの遊戯に無我夢中にな
り夕暮れやつと我家へ去つた。忘れ難いのはメーヌジョー毎年^{メヌジョー}の行事
ではないが旧暦の六月二十五日のカシチーユミの頃には子供だけ

の綱曳き合戦があり法螺貝を吹き鳴しそれに合せてハイヤブー
メーヌジョンカイローと掛声も勇ましく遊び戯れた当時の地名を回
想すれば実に懐かしい。直ぐ近くにはムラグムイ（堀池）があつてそ
の池の中には個人が飼つていた家鴨が泳ぎ回つて時々餌を求めてか逆
立ちする光景も良く見かけたものである。現在壺屋陶器事業協同組合
の場所がムラグムイが有つた位置、そこから東方約百五十メートルい
つた所に清水の泉が湧き出るアガリンカー（東ノ井戸）があり、そこ
の丘には古い更けた榕樹が二本と琉球松が三本生い茂り、又腕相撲用
の土台石も備えられて夏の暑さを凌ぐには良い憩いの場所になつて昼
間は老人達が孫を連れて涼を求め、傍らでは子供達がガヤガヤ躁ぎ
回つて賑やかな風景もあつた。大正十二年那覇を起点に嘉手納まで県
は人員輸送並に甘蔗運搬の為軽便鉄道を開通させて、直ぐ東井戸の前
を横切つて走つていた。しかしあの悪夢のような沖繩戦の際に破壊さ
れて今は姫百合通りと言う街道に変わつています。其処から約六百メー
トルの所にはサーターヤームイがあつて壺屋協同製糖工場故にチブヤ
サーターヤームイと称し、製糖期になると陶業の傍ら篤農家は非常に
多忙を極めて疲労に耐え難い表情がうかがわれていた。壺屋の村の南
側に位置しているムイヌウイー、こゝは大正の頃までは個人の製糖工
場と一軒の民家があつて周囲は甘蔗や芋畑に囲まれて頂点はやゝ平坦
で雑草が生茂り南風吹く夏の夜の暑さを凌ぐには相応しい丘で、昼間
は子供達の遊び場になつていた。夜になると若者が集まり沖繩相撲を
取つたり戯けたり夜空の星を眺めながら壺屋独特の一合取り、めいめ
いが酒を一合買ひ求めること、ようするに割勘制のこと、常日頃の勞

を癒すための会、イチゴルーイに釣られてメートルを上げて夜更かし
して翌日はヌルトルン、今やそのムイヌウイーも諸所の建物が密集
して当時の思影は全然窺うことはできません。壺屋と牧志との境界に
はランパチャヤーヌメーという俗名がありますが、其処は廃藩時の士族
が多く陣取り、殆どが寄留民で理想は高く共同心は旺盛でありました。
何故ランパチャヤーヌメーと言う地名になつていたのか、その理由は床
屋のことを方言ではランパチャヤーと称しますから床屋の前という意味
からであります。そこには一軒の床屋があつて店主の理髪師は余り学
識はないが威権と包擁力があつて、近隣会を組織して附近一帯を掌握
して其の調子に乗り、壺屋の村と悶着を起し営業上苦境に立たされて
いました。その原因は昭和六年県は那覇警察署前から県道を通す計画
を立て、那覇市へその案件を提出して、那覇市は早速議会にかけて協
議の結果全会一致で可決して、仮に候補地を牧志と壺屋を指定した。
そこで壺屋出身の市議は親交の市会議員等にも協力を求めて同意を獲
得して更に町民へ署名運動を呼び掛けて各戸を回り捺印を依頼したと
ころ、例の理髪師には断わられた。揚げ句の果は陰で牧志側の運動を
していた事も発覚した。それに憤慨した壺屋の有志達は早速評議員会
を開き、その対策を協議。意見交換の結果、あの床屋を使用しない亦
理髪師との絶交を決議した。併し町民の一部の間から個人の付き合い
までも制止するとは余りにも行き過ぎだと反発する声も聞かれていた
が結局町議の通り排斥にされた。某評議員はこんなに酷い発言もして
いたようであります。ピーチャーグワーみたいな者が片隅でピチピチ
唱えてもなんの糞役にも立つ物かと、非常に見縮つた言い分を隠れ聴

きしていた理髪師は余りの悔しさに焼け酒を飲んで男泣きしていたこと。個人的に考えた場合には気の毒な感じもしますが、大衆を相手にする職柄としては理解し難いものであります。何故表面にまで出て壺屋の村と反対したのか矢張り教養の足りなさが原因ではなかったかと思われます。結局その県道は賛成多数決により牧志側に決定して壺屋は肩透かしを食わされたような格好になりました。その償ないの為か松尾から壺屋まで市道が出来て戦後浮島通りと言う地名になっています。現在の国際通りが問題になっていた県道であります。若しあの県道が壺屋側から実現していたなら今頃の壺屋は那覇市の中心街になって尚一層の発展をなしていた筈だと想像しても過言ではないと思います。ランパチャヌメーを跡にして右へ行けばハナグチマーチューに至り、左へ真直ぐ四、五百メートルいつた処に無名の坂道がありその右側に筆者の住家があつて非常に思出の深い土地でもあります。亦左の方向にはナーカマーチュウグワーという丘があつて明治の中期頃までは琉球松が数十本も生い茂り仍つてマーチュウグワーという地名になっていたようであります。しかし何時の間にか松は伐採されて樹木はなく昼間は子供達が良い遊び場としてシマグワートーエーしたり、凧上げしたりカジマヤーミグラサーして遊び、時代に相応した遊具で楽しんでいたが、総て自作ゆえに上手下手があり凧の作り方は、糸の着け加減と後尾の紐の着け方によって遠くまで上ると直ぐ落ちて来るのがあつて、直ぐ落ちてくるのはジューブイというて下手な作り方の証拠であつた。当地は市有地で牧志二丁目の区域になつてはいるが、実際上は壺屋の管轄内にあつて諸行事も総て一緒に取

り行われていました。当地は公共敷地ゆえに掘込み墓（ニービバカグワー）が密集して冥土の雰囲気が浮んで夕方になると静粛になり五位鷲、ユーガラサーが鳴き、老人達は不吉のお告げとして嘆き、近日中に死亡者がでて葬式があると囁いていました。其のナーカマーチュウグワーも時代と共に一変して墓一基もなく道路も拡張されて行通も便利になり民家が空閑なく建ち並び墳墓地の有つた形跡は全然ありません。原因は不明でありますが北側に珍らしくも旅順港ヤーグワーと言う一軒家があつたことを記載して壺屋の名所地の案内をひとまず置いて、伝説に残る人物と武勇伝を紹介致します。

尚育王代一八二九年首里王府は幾度となく大火に遭い宮殿を焼失して新たに唐破風を改修する工事に取り掛り、その際我が壺屋の村から左官大工代用として赤嶺某なる御方が王府の使命を受けて作業に従事、専ら龍頭の製作に就き目玉の芯を急須（アンビン）を利用して入れようとしている最中に誤つて転倒、高い唐破風の屋根の先端、雨垂れ近くまできてあわやこれまでと思つた瞬間に起きあがり、何事もなかつた様に元の位置に戻り作業を続行して悠々たる赤嶺の態度に普請奉行も吃驚仰天、あの赤嶺は猿だ（サールル、ヤル）と叫んだのが愛称となり、それ以来一般の人々も屋号が上ノ口だからウイヌ、クチヌ、サールーと称して老後も上ノ口の猿祖父様と崇められていたのととで有ります。その御方は空手や武術は全然知らないがあんなに高い唐破風の屋根の上を逆立ちして縦横無尽に回つてみせる程の軽身沈着の御方であつたとのこと、亦竣工式の際にはその功績を称えられて澤山の褒美が下賜されたとの一説が残っています。

◎壺屋が産んだ生まれつきの武士渡慶次松、屋号（メーヌ、ヤーヌ、トキシ）この御方は壺屋五十八番地の自宅で荒焼工場を經營して南蛮甕の製作に就いて全然武術の道は科してないが、生れつきの（キリチブシ）蹴壊術の達人でいざ実戦になると目玉を一回転させて素早く敵の急所を突いて転倒させ、徹底的にやつつけてから直ちにその場を引きあげてくる利口な武士であったとのこと。当時は沖繩には遊郭が辻町を起点に中島、渡地と三力所に分離されていたが酒と花の色町は若者達にとつては実力を試す絶好の場所になって毎夜喧嘩は絶ず、壺屋の青年達もブサー渡慶次を頼りに胸を張つて歩き、遂に喧嘩を仕掛けて大勢の敵に囲まれて逃げ場を失ない最後の手段はブヤー渡慶次を頼るしかなく片隅に潜んでいるところ流石はキリチ武士一発で蹴り倒し、次は誰の番だと一声かけると、これは唯者ではない強敵だといわんばかりに三々五々逃げ去り悠々と難を片付けてひきあげる豪雄渡慶次松。友のメンバーの中には小柄ながらも狡猾な男がいて幾度となく喧嘩に巻き添えを食わされて窮地に立たされて一泡二泡吹かされること度々あつて此の男には非常に手を厄いていた様であります。それから数ヶ月後辻遊郭へ陶業者同志の会が催されて一足遅れて会場へ着いたところ、そこに強^{した}かな乱暴者が現われて廊下に足を差し出して通れるなら通りなさいと頑として足を引かないで、殆どのお客は仕方なく引き返して大変困っている際に渡慶次が現われて、遠慮なく失礼しますと言う瞬間に真上から相手の足を踏みつけて大きな音と共に骨折させ平気な顔をして会場へ着いた。間もなく辻のアンマーが駆け参じ先程の御礼を述べている様子を見て初めて事の成りゆきを知り皆吃

驚、一方乱暴は子供泣きしながら病院へ担ぎ込まれて、其の後一切姿を晦まして辻遊郭一带は元の華やかさを取り戻して、辻遊郭は勿論のこと一般からも敬称されて壺屋のブサートキシの名も高く持て成されていたという語り草も記憶にあります。或日の事、渡慶次は窯焼用の薪を購入する為に那覇港の浦側港^{シナトグワ}小へ行き、薪の値段と些細なことから口論となり船方全員との大喧嘩に発展。薪や棒で散ざんに殴られて瀕死の重体に陥いり知らせを受けた壺屋の親戚縁者は吃驚して担架代用に雨戸を外して現場へ行き本人を病院へ連れてゆき、手当をうけてから自宅まで運び込んだ。事件は忽ち那覇中に広がり、もう壺屋のブサー渡慶次も死んだと言う噂が流れた。その翌日渡慶次は包帯姿のまま薪売り市場の港小へ現われて一人の船頭^{フネトウ}を蹴り倒して叩きつけて見せたところ船頭達は顔色をかえて吃驚仰天、昨日あれ程まで殴り倒した者がこんな元気でしかも平気な態度には尚更恐縮千万、薪市場も放棄して天馬舟から山原へ逃避。残品の薪は全部渡慶次が荷馬車を雇い無料で我が家へ運び込んだが、誰一人も文句つける者もなく昨日の恨みを見事に果たして悠々と其の場をひきあげて帰宅。その後から益々評判は高く各地方の武士、空手の達人等が窺いにきて先生の拳法と基本の奥の手を是非拝見させて下さいとせがまれて困り果、仕方なく私には拳法も基本も流派ありません。是非お望みなら庭の広場に出てカキダミシ実戦するより以外に解決する方法はないから出合いなさいと、特異の目玉を一回転させて庭の広場で構えてみせたところ、相手はその動作と態度に深く詫びて帰ったとの実話もあります。しかし、そのブサー渡慶次も何にかの都合により大正の初期、遠い美里村

字古謝俗名クジヤーンヌメーヤールイに移転、そこで瓦製作工場に転業して順風満帆に乗り発展途上六十才余で心臓麻痺の為、晩酌中豪傑渡慶次松は如何にも英雄らしく御臨終なされたとのことであります。

歴史を繰れば壺屋の村は非常に由緒の有る集落で千八百年代の琉球国王尚瀨王（俗に坊主御主加那志前^{ボシウスマガナシメ}）が陶器製作を御覧なされる為、わざ／＼壺屋の高江洲家、屋号カマニーへ御臨席なされて自から実技を試みて大変御満悦なさつて居られたとの史跡の伝説があります。依つて高江洲の家屋は畏れ多い建造物として非常に崇められています。初明治以前の壺屋は殆ど財閥や長老達が総ての実権を握り、諸行事もその権限内に置かれていたが大正期に入つてから若者が立ち上がり青年会を組織して権力を奪還したものの青年同志の意見の対立により（ウームンド）大喧嘩となり一時実務も停滞していたが、事は次第／＼に治まりやつと統制が執れて平常に戻り、村の仕来りたる奉仕作業（ウエライ）（上令）も取り行われ旧暦の七月十七日には公共施設のムラグムイ（堀池）カー（井戸）や道路の修復などの使役があつて不参加の家庭には罰金制度に依りヌーチ（納金）をさせられる。それにも応じない家庭には町民会長の命により評議員会場に呼び寄せられて厳罰を受けていました。作業終了後は倶楽部敷地内の広場に於て沖繩相撲大会が催されて飛び入りも歓迎、若者達が得意の技を競い合い、互いの勝敗を決定づけていました。其処で総ての行事は終了する訳であります。壺屋の陶業の最盛期は明治二十八年の日清戦争当時と明治三十七、八年日露戦争当時の二回にあり日本の軍部は戦地の将兵を励ますために慰安酒を下賜するには詰める器具が必要で、それに適する

物は壺屋の南蛮甕が最も相応しいと定め、大量の注文が殺到。壺屋の全業者は徹夜で製作に励んでも到底間にあわず、水さえ漏らなければ歪んだ物でも同じ値段で売捌かれるので避風小に積み重ねてあつた廃品までも正品と共に出してぼろ儲け。それから大正六、七年の物価騰貴も折り重なつて濡手に粟を掴む様に儲け戦争成金となり正に黄金時代を迎えて莫大なる財産を増し、特に土地田畑を購入して億万篤農家になつて那覇でも指折り数えられる程の財閥になつて、壺屋はその景気と隆盛に扇がれて競争心は増して荒焼窯だけで十八カ所にも及び正に陶器ブームの時代を物語つていたようであります。

左記は当時の荒焼窯数と窯名

- 新屋敷小窯（一）^{ミヒチウグワガマ} 豆腐屋小窯（一）^{トフヤクワガマ} 南又窯（一）^{フエニスガマ} 豆腐屋窯（一）^{トフヤクワガマ}
- カマニー窯（二）^{ガマ} 新屋平田^{ミヤヒラタ} 合同窯（一）^{ガマ} 上与儀小窯（一）^{ウイユシグワガマ}
- 玉井窯（二）^{タマイガマ} 宜保ノ窯（一）^{メイホノカマ} 新屋宜保（二）^{ミヤジーブ} 現在の西ノ宮敷地に
- （一）隣地に（二）牧志地番吉村井戸附近（二）^{ユシムラガ} 東又島、小型窯（二）
- 計十八基
- （上焼の窯数）
- 島袋の窯（二）^{メイスウチ} 新垣窯（一）^{アラガチスチン} 仲本窯（一）^{ナカムト} 無名の窯ムイヌウイ近
- く（一）昭和期栄徳窯（二）^{メイタク} 高江洲（一）^{ウエアサト} 計七基
- （瓦焼窯数）
- 高江洲窯（一）^{タマイ} 明治期石川窯（一）^{ヒチヤマトキエウワ} 渡口窯（一）^{トクチ} 島袋窯（一）^{トフヤ}
- 大正期宜保窯（一）^{メイジーブ} 喜納窯（一）^{キナ} 昭和期宜保窯（一）^{シロクワ} 玉井小（一）^{タマイウワ}
- （赤物焼と封牧小）
- 新垣（一）^{ナカメハツラ} 兼次小（一）^{カニシグワ} 国吉（一）^{クニキチ} 島袋（一）^{シマクワチ} 島袋（一）^{シマクワチ}

- 島袋 (一) 島袋 (一) 島袋 (一) 国場 (一) 城間 (一)
- 高江洲 (一) 高江洲 (一) 高江洲 (一) 新垣 (一) 高江洲 (一)
- (石灰封牧窯数)
- 高江洲 (一) 翁長 (一) 宜保 (一) 宜保 (一) 宜保 (一) 宜保
- (一) 高江洲 (一)

壺屋の集落は他の集落とは異なり常に火を取り扱うので水源地が必要で、公共の池が三カ所に備えられてその池には上ノ池、下ノ池、村ノ池と称して最も大きい池はヒチャグムイで、其の外にも個人所有の池が一カ所あつて計四カ所。

それから井戸が番所井戸、下ノ井戸 (二)、大井戸、村井戸、東リ井戸の六カ所。一カ所の井戸は埋められて五カ所はちゃんと保存されていますが、堀池は全部埋め立てられて思影も残っていません。幼少の頃より成長するまで馴染んできたあの景観は忘れ難く実に心恠いものであります。顧りみれば陶業も一時は不況に曝されて陶工達も余儀なく転職する破目に追い込まれた時代もありましたが、現今は復活して観光資源の目玉商品にもなり繁栄の頂点に達して事業運営も安泰している現状では在りますが、昨是今非と変動の多い折柄いつまで続くか無限であり、殊更陶器工房が雨後の竹の子の様に県下至る所に芽生えている現実も御考慮の上、陶業者各位の御奮闘を異郷の地で願望する者の一人であります。既に御存知の通り伝統ある陶業は世々代々までも我が村を支えて実に莫大な遺業であり、依つて先祖様に対し真心から感謝を捧げると共に限り無い壺屋町発展を祈願して無知な文筆

を置きます。

平成五年 酉年 才子

宜野湾市【削除】

小橋川 清福

郷又想影 (琉歌)

- (1) 御万人又宝 焼物又壺屋
風水共々に 茂てい栄
- (2) 西又氏神や 焼物又守護い
世々代ひち合ち 村や繁盛
- (3) 南又窯基や 親父祖又光り
荒焼又甕又 産り所
- (4) とゆむ賓女堂にチジン打ち鳴ち
三月又遊び 村又御願
- (5) 真夏夜又暑さ 若者又揃りて
カーグ又上又習や 涼り処

(6) 言葉荒さしクハアラサシヤや 職業ゆいワジヤユイガヤエラがやゆら
肝心美チムククルチユラサワシタチフヤらさ我した壺屋

(7) 至極シグクワチンデテ湧ち出ムて 村ゆ補ムムユウジナタルなたる
東り井戸アガリンカーヌカサミ又ミシヌクウン要 水又御恩

(8) 高頂タカチジヌチフヤ又壺屋 老ウイテガジマルニて榕樹カシヌスエラサに
澄スミテフチガチみて吹ち流カシヌスエラサち 風又清カシヌスエラサさ

(9) 村又彼方ムラヌアマクマヌ此方ムラヌアマクマヌ又 思影ウムカジャアマタや数多ウムカジャアマタ
番所バンシユエガーヌマーチン井戸又松ウムカジャアマタん 名残ウムカジャアマタびけい

作詞清福

◎年増するムラぐとに 名残ウムカジャアマタさや勝ウムカジャアマタて

ありし様々ムラぬ
郷ぬムラ想ウムカジャアマタい

◎物ん豊ムラなウムカジャアマタて 楽ウムカジャアマタやしち居ウムカジャアマタしが

芋ムラ躑ウムカジャアマタ足ウムカジャアマタやたる
郷ぬムラ名残ウムカジャアマタり

(町歌)

(1) 栄ウムカジャアマタゆく我が町 壺屋ウムカジャアマタの町

偉ウムカジャアマタ大な先祖ウムカジャアマタの陶業ウムカジャアマタを
辿ウムカジャアマタる由緒ウムカジャアマタの尊ウムカジャアマタさよ

代々ウムカジャアマタに承ウムカジャアマタけ継ウムカジャアマタぎ技ウムカジャアマタを磨ウムカジャアマタき
輝ウムカジャアマタき壺屋ウムカジャアマタの町興ウムカジャアマタし

(2) 産ウムカジャアマタ窯ウムカジャアマタ守ウムカジャアマタる西ウムカジャアマタの宮ウムカジャアマタ

緑ウムカジャアマタもふかし賓ウムカジャアマタ女堂ウムカジャアマタ小ウムカジャアマタ一
和ウムカジャアマタむ我が町壺屋ウムカジャアマタの町

今ウムカジャアマタ栄光ウムカジャアマタの地ウムカジャアマタを照ウムカジャアマタす
正ウムカジャアマタしき神ウムカジャアマタの導ウムカジャアマタなり

(3) 誇ウムカジャアマタる壺屋ウムカジャアマタの我が町ウムカジャアマタは

御ウムカジャアマタ拝領ウムカジャアマタの地ウムカジャアマタにありて
幾ウムカジャアマタ百年ウムカジャアマタの歴史ウムカジャアマタあり

遠ウムカジャアマタい昔ウムカジャアマタを物ウムカジャアマタ語る
神祖ウムカジャアマタの足跡ウムカジャアマタ遺ウムカジャアマタ孱ウムカジャアマタ在ウムカジャアマタり

(4) 陶器ウムカジャアマタと文化ウムカジャアマタは繋ウムカジャアマタがりて

民芸ウムカジャアマタ開花ウムカジャアマタの復興ウムカジャアマタに
腕ウムカジャアマタを競ウムカジャアマタえて技ウムカジャアマタを鳴ウムカジャアマタし

名産壺屋の名も高く
観光資源の基いぞや

(5)

神火の御告の祭拜は
賓女堂と姉妹の城岳
藁鉢巻の行列も
空しく今は語れ草
永久に栄あれ壺屋の町

昭和六十二年 宜野湾市【削除】

作詞 小橋川清福